

—玉川上水物語—

これは一人の按摩の物語である。長い日本の戦争に一兵として従軍された著者の身辺には、失明の友、隻手の兄弟がまだ沢山いるという。そして、いま、明け暮れの交通戦争の犠牲者として、身の不自由を啣つ同胞が日増しにふえている。多摩川の水は、今日でも東京の人々から断ち切れない因縁の水である。この上水開設にまつわる普譚は、江戸の頃、高座で語られたということがあるが、こんな名もない盲按摩の生き方に共感をおぼえて下さる方があればと願い、「東京名物誌昭和四十五年の緑陰号」上載の文を、この一冊子にまとめた。挿絵は錦上花を添えて、特別のご好意から、長崎拔天先生の麗筆をいただいた。(東京名物誌千賀記)



カットは・谷脇素文

玉川上水物語

吉田吉之助
長崎 拔天・画

大菩薩の水

慶長八年（一六〇三）、徳川家康が江戸に幕府を開いてから二代秀忠を経て、三代家光の時代までに半世紀の歳月が流れ、この間に江戸に人口が集中して、町は殷盛をきわめていた。古昔、青丹よし奈良の都の人口は二十万といわれるが、家光当時の大江戸の人口は百万に近いと推定されている。おそらく世界第一流の大都会であったであろう。

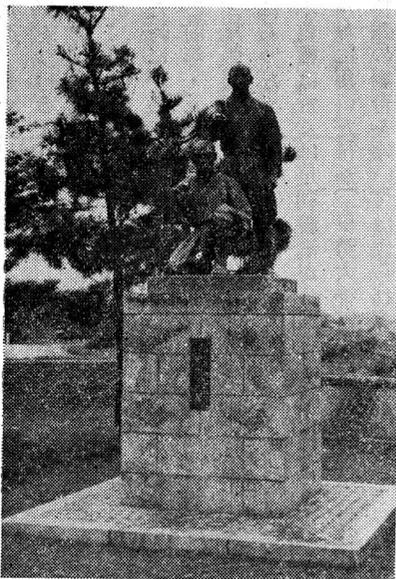
二代秀忠の時に江戸は未曾有の大火に見舞われ、その後も江戸の華といわれた火の手が八百八町の各所に拳がり、家康が入城の際布設した神田上水も、増大する人口を賄うには足

らず、水不足を訴える町民の声が喧しかった。名君といわれた家光は江戸の町造りに専念していたが、特に給水策に意を用い、その対策を町奉行・神尾備前守元勝に命じ、神尾は大菩薩嶺に源を発する多摩川から水を引くことを企画し、世にいう「玉川上水」の計画を立案上申した。この案が確定したのが慶安三年（一六五〇）で、家光はその翌年に空しく他界した。

四代を嗣いだ家綱は、父の遺志を承継ぎ、之に応ずるという意味か、「承応」と改元し、この案を評定にはかった結果、承応二年正月三日実施が決定された。工事総指揮に水道奉行・伊奈半左衛門忠克が任命され、総工費七千五百両（一

説には六千五百両）を当て、着工の運びとなった。半左衛門は工事請負人に、多摩川在の富農・庄右衛門、清右衛門兄弟を推挙した。命ぜられた兩名は非常な感激をもって実行を誓い、江戸幕府開設五十周年にあたる承応二年（一六五三）の春二月十一日の紀元の佳節を卜して工事を開始した。

水の取り入れ口、西多摩の羽村から江戸まで十里余丁（四十三軒）、この落差が僅か数十尺ということ、この道程を自然流水で導くことは容易でない。彼等兄弟はまず多摩川在の百姓数十人を人足として雇い入れ、これらに夜々提灯を掲げさせて地勢の高低を計測し、ついに、羽村から高井戸、淀橋を通り、大木戸から四谷を経て千代田城に至る水路を発見した。



玉川兄弟の銅像（羽村）

羽村から大木戸までは素掘り（開渠）で、大木戸に「玉川御上水御改場」という貯水池を設け、この池の堰で水量を調節して、過剰分は渋谷川に落とし、必要量だけを府内に導入した。大木戸以東の街路に木樋とよぶ檜材の箱管が埋設され、この管が將軍家専用水道として半蔵門から城中に導かれた。これに沿って万年石樋とよぶ通水溝が掘られ、この溝は石蓋をかぶせて暗渠とし、人馬の交通に支障なからしめた。石樋の組み石には、それまでに江戸城の補修拡充に使われていた伊豆石が舶載されて用いられた。石樋の水は四谷見附で外濠に注がれ、分かれて一方は紀の国坂に沿って赤坂に落ち一方は市ヶ谷からお茶の水へと流れて江戸城の外濠を充たした。

江戸時代にはこのほかに、その後、三田用水、桜上水など数々の民間用水の建設をみたが、その中でも最大の規模をもつ幕府直営の玉川上水を含めると、水路の延長は江戸から近江の彦根に至る東海道に等しいといわれる。

木曾 檜

幕府は検討の結果、大木戸から江戸城へ引き込む自家用水道の木樋に木曾檜を用いることとした。これは木の狂いが少なく、永年腐蝕に耐えて漏水のおそれのないものとして選定されたものである。そして木曾を領有する尾張藩にこれが供出を命じた。材の規格は白肌おとしの芯去りで、厚さ三寸、

巾尺五、長十五尺の板材の木取れるものと指定され、特に節に気をつけるよう、との達しであった。

古来、檜の美材を産する木曾の山林は、今では国有林が多いが、昔は天領（皇室御料）となっていた。徳川の天下になった時にいち時、家康の直轄地に組み入れられたが、家康死亡の前年・元和元年（一六一五）に尾張藩の所領に移された。尾張藩では山林管理の代官を置き、山村氏が代々その役職にあった。

木曾檜は古くは足利義満が金閣寺造営に用い、徳川家康が江戸城に用いたほか、伊勢大神宮の遷宮や勅願の神社建立など特殊の場合を除いては伐られないことになっていた。尾張藩の所領に移ってからは、時に、択伐（造林のために木を択んで間引きすること）の材を名古屋に集め、特殊の関係筋へ分譲することはあったが、一般には金で買えない得難い物とされていた。

そんな訳で、木曾には昔から盗伐防止の掟が存したが、承応時代に水道材を搬出した直後に掟を一層強化し、寛文五年（一六六五）に留山（留山）の制を公布し、住民の山林立入りを厳禁し、更に八停止木（八停止木）を定めて五木（ひのき、さわら、まき、あすひ、わづこ）を明確に規定し、この禁令を犯して木を伐る者あらば、八木一本首一つ（八木一本首一つ）の厳罰を課すると布令した。木曾の住民は五木の枯枝を拾うことすら怖れていた。

さて、水道材供出の幕命が尾張藩に伝達され、藩の指示が

つか並べてあった。これは安井屋提供の無料浴場である。汗と泥にまみれた労務者が一風呂浴びてから、ハヤスイ・スタンドVで安酒をひっかけける仕組みになっていた。

この時代は前年に起った由井正雪の叛乱に続いて、浪人の叛く者が跡を絶たず、幕府は関所の制を定めて浪人をあらためたり、海船法度令を出したり、切支丹を探索したりして、乱れがちの治安の維持に努めていた。

そんな世の中で士農工商の下積みになっていた人足や渡り職人にとっては、玉川御上水御用という將軍家直属の肩書きは、天下御免の金看板を背負ったようなもので、彼等の得意や思うべしである。こういう一般社会の秩序から逸脱した特殊集団の無法ぶりは、全く目にあまるものがあり、四谷界限の住民にとっては悩みの種であった。

大工派と土工派が対立し、全勝寺の庭で棍棒をふるって乱闘したとか、石工たちが石を投げて与力に頻死の重傷を負わせたなどの事件が、ひきもきらず起っていた。あげくの果ては物欲にかられた彼等は、開店休業状態の商店を占拠して、店主にインネンをつけ、身をちぢめているその家族におどし文句ですごみ、莫大な家賃敷金を要求し、応じなければ退去せよと、松火を振り廻して威嚇したりした。

町民が水道工事の進捗に協力する仕草は、彼等の狼藉を和らげながら、工事を一日も早く捗どらせようとするとする下心もあつたことだった。

山元を下達されると、山村代官は山廻り役を動員して立木を吟味し、春を待たずにこれを伐採して、雪融けの木曾川を下して伊勢湾より海路江戸へ輸送した。

江戸に揚げられた丸太は、四谷に運ばれてから木挽によって所定の寸法に割られ、大工の手で四角な箱管（外法尺五、長十五尺）に組立てられた。組立てに用いた釘は指の太さの角釘で長さ六寸、原料には山陰に産した砂鉄を用い、鍛冶職が一本づつ鍛ったものである。これは純度の高いねばりのある鉄で、当時は刀の材料として貴重なものであった。

四谷界限

当時四谷の大通りを挟んで、南に天王横丁、石切横丁、法蔵寺横丁、北におかりや横丁、荒木横丁、湯屋横丁などがあった。これらの横丁に諸方の仕事場が分かれていて、たとえば石切横丁には石工の職場が置かれていた。

水道工事の進行中は道路が掘り起されて、工事用の車が店頭（店頭）に放置されたり、石や木材が裏木戸の出口を閉いだりして住民は甚だ迷惑をこうむったが、水を待望する住民はこれらのことには不服を唱えず、全面的にこの事業の遂行に協力した。或る者は住居を飯場に提供し、また或る者は店先に湯茶奉仕の掛け茶屋をつくらしたりした。

湯屋横丁には酒商・安井屋三左衛門の店があつて、店頭（店頭）のさしかけに菰をつるして目隠とし、そのかげに据風呂桶が幾

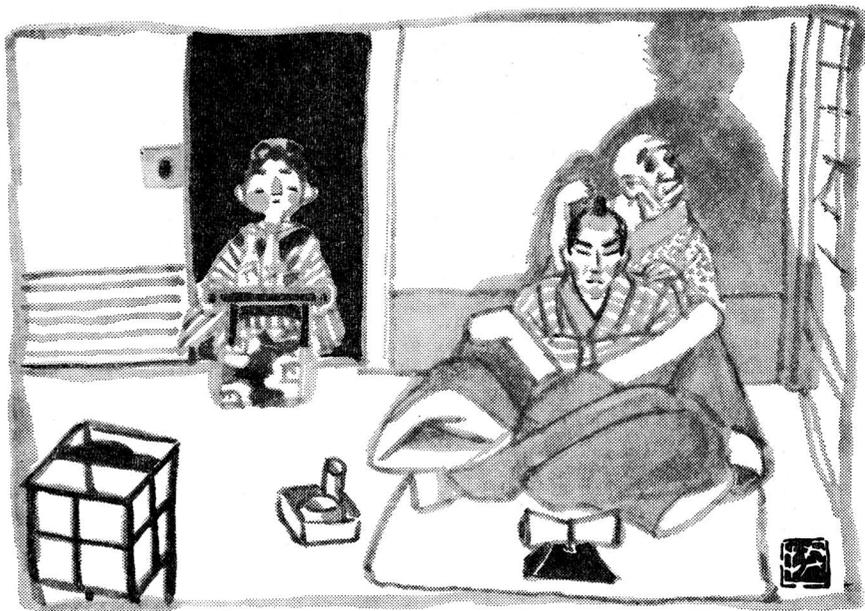
無法地帯の四谷附近で最もはげしかったのは湯屋横丁で、女人禁制は勿論のこと、帯刀の武士でさえ私用では立ち入らず、町奉行も一種の治外法権地域とみなして、この横丁の取締りは手控えている始末だった。

按摩独語

承応二年の師走もおしつまった或る夜、玉川上水請負人の庄右衛門は四谷大木戸の旅籠・大黒屋の二階に居た。心身ともに疲れ果てていた彼は、据えられた膳にも箸をつけようとせず、ただ何ごとかに思いふけている様だった。膳に立てられた二合徳利が冷えて時が過ぎていた。庄右衛門は膳をさげに来た女中にハッとした様子で雪の模様をたずねた。女中は赤い手を火鉢にかざして、「今夜は大雪になるかも知れませぬね」と云った。

音もなく降る雪の街を流して来る按摩の笛の音が聞こえてくる。彼は女中に按摩を呼ぶように命じて、そばに敷いてあった布団に横になった。やがて襖が開いて按摩が招じ入れられると、燈芯が風をくらって、按摩の影が大きく壁に揺れた。按摩は白い呼吸で、「もう一寸も積りましたらうか」と、揉み手をして雪の話で挨拶をした。

下から揉みにかかって肩から首筋にかかると、「旦那、首の凝りがひどう御座います」と云って、その辺をさかんに揉みほぐした。そんな間に、「お武家様でもなし、お商人さん



でもなし……」などと独り言を云い、「玉川御上水のお方さまか、な」と云う。ピタリ役柄をあてられた庄右衛門はドキンとした。上下を揉み終った按摩が首筋から頭にもういち度、念を入れた揉みを入れて、「何か御心配ごとも……」と問いかけた。問われた庄右衛門は、積もる年期か重なる年輪か知らず、さすがに偉いと按摩の勤どころを賞めた。

西風がたつて時に板戸が鳴る。女中がさいぜんの燭冷ましをつけなおして持って来る。庄右衛門はもう一、二本つけて来いと、女中に命じ、起き上って居すまいを正し、火鉢に炭を注ぎ、按摩に座布団をすすめた。

按摩は一膝さがって、遠慮がちに辞退するふうだったが、庄右衛門が「燭冷で申し訳ないが……」と差し出す猪口を押し戴くように受け、注がれた一合をゴクリと飲み干し、堪能の風情を示していた。庄右衛門が残りを独酌でやっている間に、また女中が上って来、ひね沢庵を添えた四合徳利の盆を二人の間に置いた。

按摩は座布団からおりて、指を折り曲げながら、「いよいよ吹雪き始めましたようで」と、帰りの道に心を馳せながら揉み賃を待っている様子だったが、庄右衛門は、「もう一杯」と新しい徳利を手にした。そして「首の貴公にどうして儂の分限がわかるのか？」と訊きたたすのであった。舌なめずりして返事をためらっていた按摩は、外の吹雪に気をとられる様子で、暫く黙っていたが、二杯目を飲み終わると、これ以

上はいけませんという手振り酒を辞退し、手にした猪口を横脇に押しやり、むぎ出しの白眼を自分の指でさして、「旦那に賞められた手前の勤は、これじゃござんせんで、こっちの方でござんす」と云って、その指を自分の鼻の穴に押し入れ、ひねって見せるのである。そして、いい気嫌で、「御馳走分だけ揉まにゃ」と、気安い口調に変わり、庄右衛門に横になれとすすめて、「雪は一関を鎖して歩前まず、酒は半生を廻りて家路を忘れしむ、知んぬ汝の旁に侍る応に縁あるべし……」と、低吟しながら再び揉みに入った

按摩は酔眼朦朧の庄右衛門に対し独り言のように自分の半生の思い出をなが々と語るのであるが、その話は――

木曾谷

俺は木曾の藪原の水呑み百姓の家に生まれ、物心ついた頃にはおふくろの手ひとつで育てられていた。九つの時にひどい飢饉があって、蕨や葛の根を掘って露命をつないだ。おふくろは口減のために俺を福島の木挽のところに預けた。

夫婦二人きりで子のない木挽の親方は、俺を夷子のように可愛がってくれた。俺はそこで懸命に木を挽きつづけた。年期が積むに従って背中が丸まって、猫の五郎七と称ばれた親方にそっくりとなり、世間では親方を猫七と称び、俺のことを猫八と称んだ。この親方は信心が厚く、また学問の素養があって、俺に四書の素読を授け、唐詩なども教えた。

いつしか十年の年期が明けて、俺が十九になった時、福島で大編屑の嗅ぎわけ競技があって、五木を一発の狂いもなく言い当って、俺は代官から感状を貰った。その年、親方は還暦を迎え、寄る年波に身体もめっきり衰えたので、代官屋敷の新築材を挽き終えたのを最後に、仕事をやめて引退してしまった。俺は御礼奉公のつもりで、相変らず丸太の手間挽きを続けて、親方夫婦の食い扶持まで稼いでいた。

その頃、木曾では盗伐が流行って、民有林だけでなくお上の山にまで盗み及ぶようになった。尾張藩では、代官が屋敷を新築することにも疑いの目を向けたが、だいたいその取り締りが手ぬるといって、兵頭嘉門という武士を代官の目附役として差し廻して来た。

風頭無頼

兵頭には十数人の若い手下がついて来たが、その大方の者は前髪は剃ってはいるが、揉み上げを剃らずに、米噛みから首筋までザンバラ髪を垂らして風頭のような格好の者が多く、無頼の年長らしい男は無精髻を生やした貧乏鐘馗のような風体であった。この者共は武家の子弟らしい教養もなく、ざりとて、山のことについては皆目暗く、材木の△ざ▽の字も知らない者達で、村の者は彼等を生半可とか生兵法の生をとって△生衆▽と称んでいた。

或る日、代官屋敷の新築披露があって、親方について俺も